

天皇制政府の内務省に禁止処分にされた

一九三一年版、一九三二年版の『日本プロレタリア詩集』

二〇一三年七月九日

藤原 義一

年度版の『日本プロレタリア詩集』が発行されていました。そのうちの日本プロレタリア作家同盟編『日本プロレタリア詩集 一九三二年版』（戦旗社。一九三二年六月）、日本プロレタリア作家同盟編『日本プロレタリア詩集 一九三二年版』（戦旗社。一九三二年八月）の内務省が検閲に使った本が国会図書館に所蔵されています。この二冊は、インターネットの国会図書館の近代デジタルライブラリーで、読み、印刷することができます。この本を読みながら天皇制政府の内務省の検閲ぶりを見ることにします。

当時の内務省の検閲制度

まず、当時の天皇制政府の内務省などの事前検閲についてのべます。

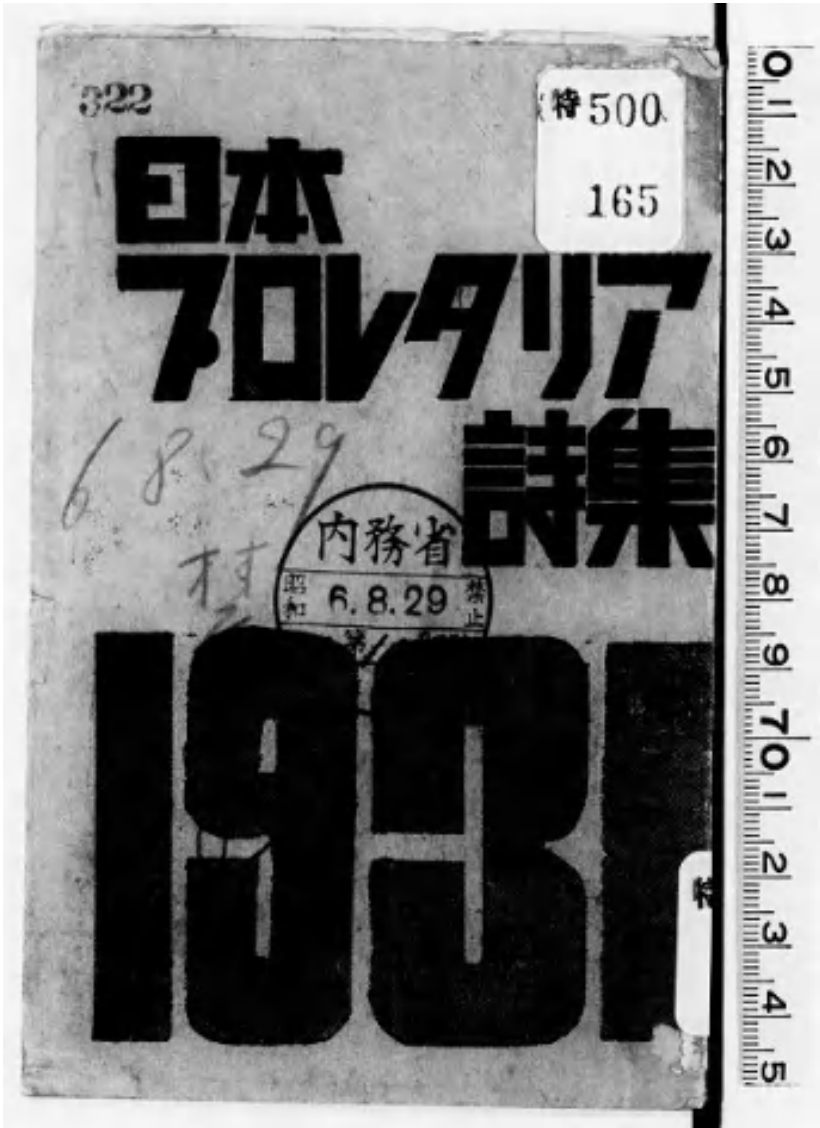
著作物は、出版法による文書、図書を発行した時は発行三日前に内務省に製本二部を納本する必要がある、書簡、通信、社則、引札、番付、写真などは内容が取締法規に触れないもの限り届出が省略されました。

内務省は、讒謗律（さんぼうりつ）、新聞紙条例、出版法、新聞紙法、映画法、治安維持法などにもとづき、書籍、新聞、映画の記事・表現物の内容を審査し、不都合があれば、発行・発売・無償頒布・上演・放送などを禁止や一定期間差止する検閲をおこないました。行政処分として、現物の没収・罰金、司法処分として禁錮刑をおこないました。

『日本プロレタリア詩集』一九三一年版

一九三三年版です。

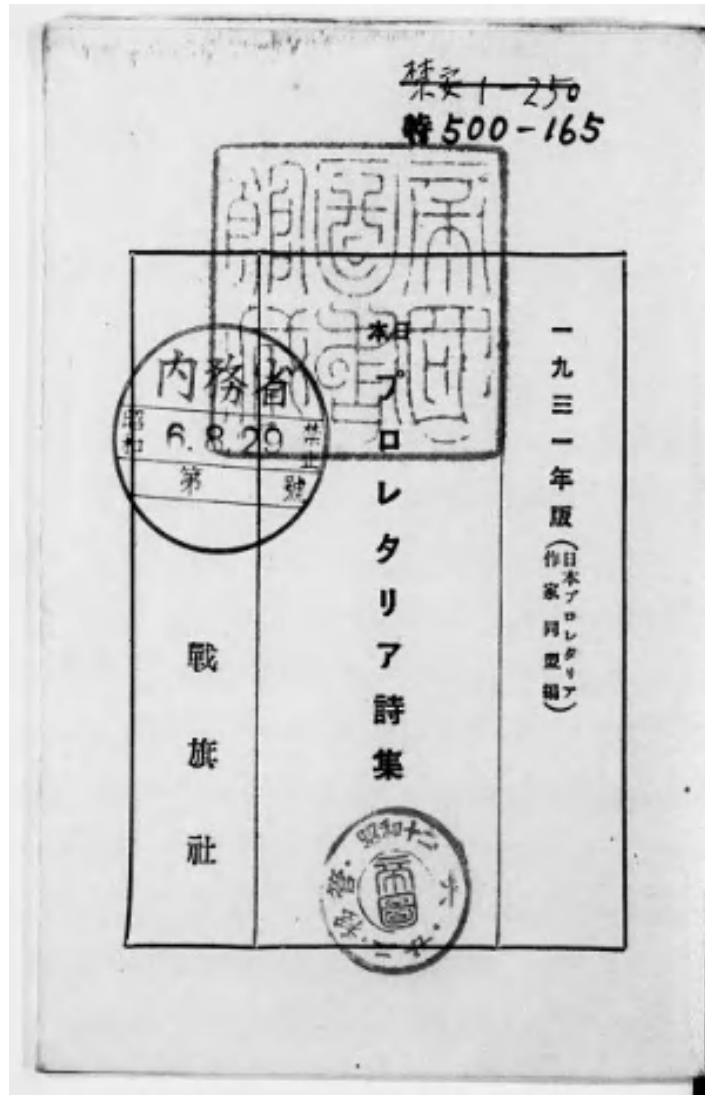
奥付を示します。



表紙に検閲の結果が示されています。
 丸い印には「内務省 昭和6・8・29 禁止 第●●●●号」とあります手書きで
 「6・8・29 村●●●●」と見えます。



中表紙にも、同じような印が押されています。



この本には、つぎのような作品が掲載されていました。

入營萬歳！・新井徹

俺達だ・B丸のK

唯だ一つのものへ・大道寺浩一

×口は彼らに・橋本正一

ルーマニアからの戦利品―水牛・長谷川進

おつ母さん・東園満智子

革命記念日に・伊藤信吉

女子軍の意気・石井秀

私の母・今野大力

手・今村桓夫

母の手紙・一田アキ

革命十三週年を記念するサヴェート同盟・窪川鶴次郎

玄海灘・金龍齋

故春藤の思ひ出・小林總吉

妹よ・京山あい子

戦士たちに・森山啓

護送車・村田達夫

戦ひの前に・松山達枝
 レーニンの年譜から・西澤隆二
 雨の降る品川驛・中野重治
 貧農のうたへる詩・長澤佑
 再建への道・白須孝輔
 感謝・下川儀太郎
 田打應援隊・千田岩四郎
 五月祭へ！・重政順平
 母よ！その日のために・穴戸六郎
 夜業をおへた鐵工所・田邊耕一郎
 三月十五日・田木繁
 機關庫の俺等・瀧澤二一
 支那・高木進二
 横顔・上田進
 男の歌・上野壯夫
 白旗×旗・村×正二

『日本プロレタリア詩集』一九三二年版

つぎに一九三二年版を見ます。
 奥付です。



表紙の右上に「内務省 昭和7・10・5 禁止 第27号」の印が押されています。

「事務官」の印もあります。
左下には手書きで、つぎのことが書かれています。
「全部不良 禁止可燃哉 10・5 警視庁手配済 望月 記入済」



この本にはチェックした跡が残されています。
まず、「序」です。

冊501
77

序

年刊日本プロレタリア詩集一九三二年版を讀者に送る。
昨年度の年刊詩集の発行にあつても吾々は、それを要求し奨励し批判する類の勞農大家を全期から陰さなかつた。だがそれらの「観音」の絶對的多数は、昨年度に於ては單に、全海の企業、農村、學校等に必ずや散在すべきところの、尙し未だ組織的關係を結ばず、組織へ噴出することが可能なところのものとして、容れられてゐたに過ぎない。爾るに現在三二年版を刊行するにあつて吾々は、この詩集を待ち受けてゐる幾千の同志諸君の大多數を、吾々の組織圏内に見出すことが出来るのである。——一九三二年版年刊詩集は、實にそれらの諸君が未曾有の進化する社會激動の卒から吾々の組織の新たな衝き手として、詩の分野に大進を擧げて進出して来た年度に於ける詩歌の取扱である。三一年四月より三二年三月に至るまでのプロレタリア詩の現状は、持付治形體の作品をも含むを調査し得る限りの多くの出版物の中より集め、更にその中より三二年版を比較的正しく

特徴づけ得る作品を選抜したものである。

即ち三二年四月より三二年三月に至るまでには、戦争とプロレタリアの激戦の中で、吾々は新たな詩人、詩歌愛好者の組織のために、創作方法における唯物辯證法、詩及び詩論におけるレリエンの露液性のために、帝國メドメとプロレタリアとの闘争のために、皆つて無き努力を以て闘ふ役割を與へられた。かうして第一に吾々は、組織活動において若干以上におし進んだ、同盟の詩人数は數倍となり、諸地方における同盟の詩人、サークル員、通信員等の詩作活動は著しく高まつた。この事實は年刊詩集に反映せずには居れなかつた所のものである。同時に創作活動においてもこの期間に全勝として吾々は従前にならざることを示したが、爾る既に批判されて来たやうに、當面の最重要な課題たるメドメとプロレタリアに對する闘争において吾々は尙立ち遅れを示した。その立ち遅れは詩における觀念論又は機械論的傾向と結び合つてゐたので、詩の創作方法における唯物辯證法のための闘争によつて克服されようとなつてゐた。すなはちこの年刊詩集は、詩人達が

右の期間において、どの程度に作品をもつて帝國主義反メックスとファシズムとに對する闘争を遂行したか、又どの程度に詩人は辯護法的唯物論者としての觀點を深化したかを、具體的に物語るものである。

更にこの期間においては短歌、俳句、川柳、民謡等の多數の作者が、蓋しあたりそれらの形態をもつて階級的必要を歌ひはじめ、更に進んでそれらの貴族的、手工業的、又は原始的な外形の覆被を脱り、新たな内容に即した物束なき形式を持ちはじめた。それらの過渡的な作品の数は、甚大である。然しながらその大多數は、向形式と内容の不統一を示してゐると共に、抽象的機械的なもの、又は事實をロマンチックに歪曲せるものが多いので、吾々はこゝにたゞ、詩歌の舊形態よりプロレタリア詩の無拘束な形態への發展の途上にある數多の作品を代表するものとして、比較的優れた若干のものを「附録」として收めた。

斯くして尙多くの粗蕪があるかも知れない。同志諸君はその指摘を許しなさいことは勿論、この詩集を生きた社會の状況の中におき、詩人の現在における任務

の觀點から、大衆的に感に杜刺されんことを希望する。

一九三二年七月

同盟軍會作家同盟 日本文壇
日本プロレタリア作家同盟



目次にチェックが入っているのは一か所。「生ける銃架」です。

日本プロレタリア詩集 一九三二年版

目次

| | | |
|-----------|-------|------|
| 生ける銃架 | 横村 浩 | (一) |
| スバルタスの道を | 上野 壯夫 | (九) |
| アルメニアの兄弟へ | 福井 龍 | (一五) |
| 愛する大陸よ | 金堂 清 | (二五) |
| 「黨よ指令を」 | 松村 作治 | (三三) |
| 建設のロシア | 村田 進夫 | (四三) |
| 全村が終つた時 | 佐野 徹夫 | (四七) |
| 公判の日 | 山田 一 | (五七) |
| 錠を撰つて | 北山 稔子 | (六三) |

いろいろな作品にチェックが入っていますが、ここでは、「生ける銃架」のものを抽出します。

この本についての内務省の検閲の仕方が、それでおおよそわかると思うからです。

生ける銃架

——高洲駐屯軍兵卒に——

横村 浩

高壁の鼻を分けて銃架の影はけふも続いて行く
銃架よ、お前はおれの心臓に異様な執情を與へる——血のやうな夕日を浴びてお
前が歌々と進むとき

お前の影は人間の形を失ひ、お前の姿は背壁に隠れ

お前は思想を持たぬたゞ一個の生ける銃架だ

さのふもけふもおれは追んで行く銃架を見た

列の先頭に立つ日や旗、揚々として陣馬に舞る將軍たち、倒れざる鐵の扉で

土の群——

お、この集団が姿を現はすところ、中国と日本の権制者が手を握り、犠牲の××は二十二省の土を染めた

(だが経験は中国の民衆を敵へた！)

見よ、愚劣な××族に對して拳を振る子供らを、顔をもむけて罵る女たちを、無言のまま反抗の視線を列に灼きつける男たちを！

列はいま赤天の城門をくぐる

——明け、資本家と利権屋の一族のあげる歡呼の聲を、軍樂隊の吹奏する勝利の曲を！

やつら、資本家と將軍は確かに勝つた！——だがおれたち、どん底に喘ぐ労働者國民にとつてそれが何の勝利であらう

おれたちの唇は歡呼の聲を叫ぶにはあまりに干乾びてゐる

おれたちの胸は凱歌を擧げるには苦し過ぎる

やつらが勝たうと負けようと、中国と日本の見境の上に××軍の鞭は層一層高く鳴

り

暴×の鞭は更に烈しく喰ひ入るのだ！

（感）

おれは思ひ出す、鈍劍の冷く光る夜の間

反×の傳單を貼り廻して行つた労働者を

相群の蔭に身を潜め

軒下を忍び囁を攀ち

大膽に敵の目を凝めてその男は作業を續けた

彼が最後の一枚に取り掛つた時

歩哨の鋭い叫びが彼の耳を衝いた

彼は大急ぎでピラを貼り

案早く橋手の小路に身を隠らせた

その時彼は背後に迫る靴音の聞き

ゆくては強めく銃剣を見た

彼は地上に倒れ、次々に×き×される銃×の下に、潮の退くやうに全身から脱け

て行く力を感じ

おとろへた眼を歩哨の掲げた燈に投げ

裏を捨てられ泥に吸はれた襟草を見詰め

手をおすかに擧げ、野を懐かし

失はれゆく感覚と懸命に闘ひながら、死に至るまで守り通した鶴の名をとどれど

ざれに呼んだ

……中、國、共、×、黨、萬……

——秋。奉天の御上で銃架はひとりの同志を呼び去つた

しかし次の日の暮れ方、かれは再びゆく労働者のすべての拳しの中に振りしめら

れたピラの端を見た、電柱の前に、倉庫の横に、風にはためく旗を見、同

志よ安んぜよ、君が死を以て賭り付けたピラの跡はまだ生々しい

残された同志はその上へ次々に傳單を貼り廻すであらう

白樟と赤楊の葉なり合ふ森の茂みに銃架の影はけふも續いて行く

お前の歴史は流×に彫られて来た

かつて鱈戸の森に岡田の岸に、また朝鮮に臺灣に滿洲に

お前は同志の叫を×き胸を×り

堆い死屍の上を×に降り抜けて突き進んだ

生ける銃架。おう空を隔れて野に轉ぶ眼の裡に、風は故郷のたよりをお前に傳

へないのか

愛するお前の父、お前の母、お前の妻、お前の子、そして多くのお前の兄弟たちが、土地を運はれ馳騁を拒まれ、飢えにやつれ、歯を喰ひ縛り、拳を握つて、

破く北の空に投げる憎しみの風は、かすかにもお前の夢には通はぬのか

突き捨てられる立降の札。銃首に對する大衆抗議。全市を指がすゼネストの叫び。

銃崩れを打つ反Xのブマ。吹きまく弾Xの嵐の中に生命を賭して闘ふお前たち

おれたちの前衛、あゝX×X×X×！

——それもお前の眼には映らぬのか！

生ける銃架。お前が目的を知らず理由を問はず

お前と同じ他の國の生ける銃架を射し

お前が死を以て齎らねばならぬ前衛の胸に、お前の銃剣を突き刺す時
背後にひびく萬國資本家の嘲笑がお前の耳を打たないのか

突如鉛色の地平に鈍い音響が爆裂する

砂は崩れ、影は歪み、銃架はXを喰いて地上に倒れる

今ひとりの「忠良な臣民」が、こゝに愚劣な生涯を終へた

だがおれは期待する、他の多くのお前の仲間が、やがて銃をXにXひ、剣を機

X

自らの解放に正しい途を捜び、生ける銃架たる事を止めるであらう

起て滿洲の農民労働者

お前の怒りを蒙古の風に録へ、鞍馬の溶鐵爐に溶かし込め！

ふう迫りくるXの怒濤！

遠くアムール河岸を響む波の響きは、興安嶺を越え、松花江を渡り、哈爾濱の寺

院を擁すり、聞島の村々に鐘はり、あまねく遠境の公同を告るがし、日本府也
軍の陣營に迫る

あう、國境を越えて國を結び×の防塞を築くその日はいつ。

(大衆の文)

